

浄土

十二月号

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承認雜誌)第三五二号
昭和四十一年十一月二十五日 印刷 昭和四十一年十二月一日 発行

第三十二卷

第十二号



法然上人鑽仰会





迷いはらう仏母

准 胝 観 音 (重文)

京都・大報恩寺
(千本釈迦堂)



仏母（ぶつも）という言葉がある。あらゆるらほとけを生みだす母なる働きを、みほとけに見たて、その働きに応じて数多くの仏母を産み出してきている。准胝（じゅんてい）観音はこの仏母という尊称を受けるほどに、観音のなかで特異な性格をもっている。というのは、ほとんどの観音が身にふりかかる外面的わざわいを除いてくれることを中心にしているのに対し、この観音は外面的なわざわいばかりでなく、心のわざわいをもとり除いてくれるのだ、とお経にはつきり示されているからである。

そのせいか、親しみ深いお顔のなかに、心のみにくさを見通しているかのような、清らかな眼が印象的である。作者である定慶はそのことを意識していたのであろうか。すがすがしい感じを受けとるだけでも、多忙な現代人には確かに心のいこいがある。それだけでも、どれだけ悩める者にとっては嬉しいことか。

千本釈迦堂に安置されている六観音の一つではあるが、見事なみほとけの群像であろう。装飾的衣文の巧みな定慶は耳の周辺にも気を配っているが、運慶二十歳の作だという大日如来のお耳を知るものは、あまりにも似ていることに驚くであろう。



仏法修行せざらんは、

実にたからの山に入て、

手をむなしくして、

かへるためしなり。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙「仏手」松濤達文画

随想……………佐藤行信・長谷川宣丈……(2)

成道会によせて 明星を仰いで……………梶原 重道……(4)

馬から羊へ……………安居 香山……(7)

念仏談義 先ず名号を称えよ……………藤井 実応……(10)

— . — . — . — . — . — . —

無媒随録……………須藤 隆仙……(13)

お経の話 法然上人と観経疏……………村瀬 秀雄……(14)

黒本尊記(2)……………鶴田 湛泉……(23)

古河城主 土井利勝(2)……………藤井 亮彦……(20)

三身即一の阿弥陀仏(2)……………岡本 薫……(26)

— . — . — . — . — . — . —

現代語訳 歎仏頌……………吉田 定久……(32)

浄土宗のおしえを学校教育においていかにいかしているか……………(18)

ご法語をいただく……………(31)

連載 話 みんなの法然さま・虚仮(こけ)の心……………高橋 良和……(28)

想

随



ローマ法王と謁見

佐藤 行 信

先般十一月七日、全日本仏教会の仏基親善使節団の一員として、ヴァチカンを訪問しローマ法王に謁見する機会を与えられた。世界で唯一人、アイボリーホワイトの法衣を着たパウロ六世に謁見出来たのも、全日本仏教会々長岸信宏貌下のメッセーシを持参した正式訪問であつたからであり、団員十五名に限りヴ

我々が謁見する人の為の待合室まで行くのは、大理石を敷き詰めた部屋を十三も通過しなければならなかつた。そして待合室で十五分程待つてから、隣の、小部屋ながら豪華な法王謁見室に案内されたのであつた。この謁見室の窓から毎日曜法王がサンピエトロ広場に集まる信者に祝福を与えられる部屋である法王パウロ六世は、マリラ枢機卿と一緒に出て来られた。慈愛に満ちたまなごしの、非常に温和な親しみ深い法王であつた。

法王がお席に着かれてから、五島団長が全日本仏教会々長から託されたメッセーシを代読し、それに答えて法王から、世界平和を通しての仏基親善を望むとの御言葉があつた。ついで全日本仏教会よりの献上品を土川副団長が贈呈。我々は法王自ら一人一人記念のメダルを手渡され握手を賜わり、最後に法王と我々団員が記念写真に収まって謁見を終つた。僅か十五分程の時間であつたが、これで今回の使節団の使命が果された気持で、一行全員、清々しい気分でヴァチカンを後にしたのであつた。

「随分急いで歩いてますね、まるでかけ足のようだ」と、ある日学校の帰りに途中で出あつた学友にいわれた。「何だつてそう急ぐんですか?」と聞かれる。そこで、はじめて自分が無意識の中にせかせかと歩いているのに気がついた。急用があつたわけではない。その頃何となく気分的に余裕がなくて、あれもしなけりや、これもしなくちっちゃと思うばかりで何もしていかない時だつた。何気なく問われた言葉で、無意味な焦躁の中を空廻りしていた私は、はっと目の覚める思いであつた。先日私は一人で上野での所用の後、一人で谷中から本郷近辺の文学散歩をした。「五重塔」の天王寺——「三四郎」に出てくる団子坂——鷗外の旧居観潮樓の跡——漱石の「猫」を書いた家の付近——「雁」の無縁坂、そして湯島天神で打ち止めとした。これも勘にまかせた当てずっぽう。戦前のこの辺りの様子は本で読む以外知識はないが、広い道に出ると自動車がひっきりなしに去来するので、懐古趣味のセンチメンタリズムはもろくも崩れて行つた。ただ「無縁坂」だけは、あの可憐

アチカンより許可が下りたのである。勿論許可が出る迄の全本仏教会の外務省を通じての働きかけは大変なものであった。ローマの西端、テーヴェレ川の右岸に在るヴァチカンを訪れるが、法王に謁見と云う事はなかなか簡単には出来ない。一九二九年二月十一日の樹立以来、法王を頭にいただくヴァチカンは世界中のカトリック教会の総本山として宗教会に君臨している。国境線は無いが、約千人の聖職関係者がいる独立国である。

当日我々は、サンピエトロ広場から、サンピエトロ寺院に向かって右手にあるゲートから入ったのである。美しい古式豊かな軍服を着たスイス人の衛兵（歩く中立国スイス人が衛兵になるとの由）の見守るゲートには、三年前迄日本におられたマリラ枢機卿が我々一行を出迎て下さり、法王の謁見室まで案内して下さった。途中通った中庭は誠に美しく、サンピエトロ寺院を内側から見る景色も素晴らしいものであった。十分程歩いた後、十四世紀より法王の宮殿として知られ、中に一四〇〇室あると云われるヴァチカン宮殿に到着した。

歩 く

長谷川 宣 丈

「歩く」ということが昔から好きである。気持がむしろしゃしたり、妙に重たく沈んでいる時、外に出て風に吹かれながら真直ぐに歩いて行くと、いつの間にか心はやわらかくほぐされ、薄黒い煤みたいなものが風に吹きとばされて空に飛んで行ってしまふ。

勿論野や山や、静かな田園を歩くのも好きだが、都会の雑沓の中を歩くのもいい。そこでは本当に一人きりの気安さをあじわえる。「考えながら歩いていましたね、イギリス人のように」

こんなことをいわれた。ちょっときざなセリフだと思ったが、一体自分は考えながら歩くことがあるのだろうかと思ひ改めて考えさせられた。とりとめもない思いにふけていることはあるかも知れない。しかし大体が注意散漫の方だから、哲人みたいに一つの思索にこもって歩くなどということはないようだ。

なお玉さんが、ひっそりと暮らしていた頃そのままに、古びて薄暗く、しかし落着きのあつたたたずまいを見せていた。

まもなく大寒。歩いて行くと鼻の頭も耳の先も痛くなる頃が間近にひかえている。でも私は夏より冬のこの厳しさが好きだし、夜の底冷えよりも朝の明るい冷たさは寧ろ快いので速足にぐんぐんと行く。この朝晩通る道はよく私の題材となっている。道の方では又かと思つてモデル代でも請求しそうである。けれどもこの道は私の軌道みたいなもので、年がら年中この上を歩いているのだから因縁浅からぬものがある。この道を歩きながら私はその日の予定を立てたり、この道を帰りながら今日あったもろもろの出来事を思い出し、家に帰り着いてからのことを、空想したりする。

又。この「歩く」ということは「生きる」と相通じることと思う。一步步歩くことによって、その人の生活が転開をみるのだから。そう考えながら今日も「歩く」のです。

明星を仰いで

梶 原 重 道



十二月八日の曉、夜明けの明星のきらめくとき、悉多太子は正しく悟れる人となり給うたのである。大地は喜びに震い世界は明らかに輝いた。天華が降り、妙楽が奏でられ、悟れる太子世尊はよろこびに歌い給うた。

この苦しみの家を、作るものを求めて見つけ得ず、輪廻のわだち廻り廻りて、苦しき生を幾度重ねし、されどいま、汝、家を作るものよ、見出されたり、再び家を作るなし、すべての垂木折れ、棟木こわれぬ、こころ、愛を離れて、涅槃にいたれり。

太子の坐したもうた菩提樹の枝は、葉は、幹は、七宝とかがやき、光がながれて世界を照らした。

まさしくこれは、限りなき歡喜のあらわれである、苦しみ

も悩みも、よろこびも悲しみも、すべてを解決した精神の清澄な安定した境涯のかがやきなのである。

方向もわきまえて大海の航路に、燈台の光を見出した力強さであり、こんもうの暗の中に、明るさをとりもどした大きな精神の安らいである。悩めるものにとって、苦しめるものにとって、この力強い精神の安らいは何を意味するのであるうか。

大きく急転した現代の社会に、目まぐるしいまでに展開した現代の社会のあらゆるすがたの中に、果して我々の心はこうした力強い安らいが伴っているのであろうか。政治はもとより、教育の問題も、経済の問題も、文化の問題も、それらの中にとり残された孤立した精神の空虚さに気づいているで

あろうか。

高速化されているのは鉄道や、自動車のみでなく、我々人間の生活に直結したインスタントばかりで環境が埋められ、くらしのすべてが落ちついてはいられなくなったのである。

小さなわが家だけでも、テレビのスイッチ一つをひねれば大騒ぎが手にとるように報道されるし、ラジオのスピーカー



からはカン高い歌声が流れでるし、いつわれわれがどこで静かな生活を味うことができるのであろうか。

スジャーター娘のささげる乳糜^{かゆ}をうけて、気力をとりもどし、草刈の童子から吉祥草をうけて座とせられ、菩提樹下の金剛座に居をしめられた太子の誓願は、今日この社会において如何なる意味をもつのであろうか。

私は今日にこそ、この金剛宝座の太子の姿をとりもどす必要があろうと思うのである。

世間の何もかもが余りにも騒ぎすぎる時代となってしまうたことは誰もが認めるであろう。それは単に交通の騒音ばかりではない。商店街の客よせの拡声音ばかりではない。点滅にあけくれているネオンの光ばかりでもなく、街頭に塗りつぶされた原色の交錯ばかりでもない。目にみるもの、耳にうるもののすべてが正常を失っているのではないだろうか、全くバランスを失ったすべてのものが現代というものを形成していると思うのである。

派手やかな歌手や、はなやかな野球選手にのみ騒ぎたてているばかりでなく、そのあぶりにも似た勢いで、われわれの大切な生活がバランスを失って騒ぎすぎではないだろうか。平静を欠いた高ぶりにゆれているのではなかろうか。云わば過剰の中の廻転が今日我々の生活を形づくっているのである。

家庭におけるわが子への教育一つにしても、高校の入試を頂点として、子供達への教育が過剰なのである。みんなが「我」を忘れてしまった大きな高ぶりの中に、笛や太鼓で踊り狂っているのではないだろうか。

ゆきとどいたコマールシャルのおかげで、すっかりもの知り

になつてしまつたのである、えらくなつてしまつたのである。沢山のおまけや、景品や、おみやげのおかげで、いつのまにか幼児の魂はかけごとのあたり、に關心を育んでしまつたのである。チューイングガムを買えば自動車があたるのである。よい声で歌つて鐘がなれば外国旅行もできるのである。誰が好んで地味な一筋の道を歩むであろうか。五色のテープが乱れ飛び、花束がおくられ、豪華なみやげを手にして、万雷の拍手の中に舞台の上から大衆をみおろしたとき、ほんとうに「我」という姿がそこにあるのであろうか。

さわぎたてられ、あふられてえらくなつたわれ自らが、魂を失つて夢遊化しているのが今日の実態というものではないだろうか。足もとは少しも地についていないのである。浮草のように時流にふわついていのである。まじめな自主性がいつ、どこで培われる余地があるであろう。青少年のいまわしい非行の集団化の原因も、ここにはないと誰が断言できるであろうか。

さてこう考えてみると、ものを思い、ものを考えることからは、ほど遠くなつた時代環境ということを感じるのである。つまり精神が置き去りにされた跛行状態の中に、夢遊しているわれ自らの姿を素直に見直してみる必要があるのである。

る。

十二月八日釈迦成道の姿は、かくして釈迦自身であつたばかりでなく、現代のわれわれ自身の大切な問題なのではないだろうか。

菩提樹下に正座して静かな思索する姿は、精神の跛行におちいつた現代人がまず真面目に、しかも真剣にとり組まねばならない指標なのではなからうか。考えることを忘れ、想うことを離れて人間から遊離してしまつた物質偏重の時代層の中に、今日を生きぬく正しい方向がここにあると思うのである。

ニイチエが真夜中に静かに胸に手をあてて考えてみよ、とといったことがある。確かにこうして考えてみると、自らの本当の姿がわかるのではないだろうか。わが本性を見出すことはこうして静かに考えることなのである。騒々しい現代の社会環境の中で、わが本性に会ふときはただこうして考えるときのほかにはない。菩提樹下の悟りはこうして考えることにあつたのである、孤立し、置き去りにされてゆく現代の魂がこのとき、真実によみがえるのである。

自らの正しい姿を見出し、自らの精神を深め、跛行状態をただしてゆくために、私は明星を仰ぐべきであると思うのである。そしてそれが成道会の今日のところなのである。



馬 か ら 羊 へ

安 居 香 山

(大正大学学生課長)

馬の年もとうとう師走を迎え、来年はおとなしい羊の年となる。「ひのえ馬」とかいふ事で、今年はいろいろ話題をまいた、八百屋お七が「ひのえ馬」であつたため、男を食いころす危険があるとかいふことで、この年に生れた女は嫌われるのが、昔からのならわしであつた。そんな馬鹿なことがあるものかという事で、新年には、「ひのえ馬」で成功している有名無名の女性が、話題として取りあげられ、一時人気を呼んだ。マスコミも、よく探してきたものだと思ふ程、いろいろうの人を呼び出して話題にしていた。そうした迷信打破の風潮が、大いに流れたのであつたが、

やはり、日本人はこうした迷信に弱いと見えて、出生率も、大分減つたといふことである。ところが、今年も下半期に入るともう大丈夫とばかり、どっと結婚式をあげるようになり、このところ、どこの結婚式場も、押すな押すなの盛況とかいふ事である。人間の永い歴史の中で養われた根性というものは、仲々に直らぬものと見える。こんなことで騒いでいた馬も、もう残すところ僅かで、今度は馴しい羊の年を迎えようとしている。

一体、十二子というものを、こうした動物にあてはめることが、何時頃から始まつたものか詳しい事は知らないが、

中国では、已に紀元前十四世紀の殷の時代の甲骨文字に、十二子の名が出て来ているから、その始源は、誠に古いと言わねばならない。しかしその当初は、今日のごとき、「ね」「うし」「とら」と言った具合に、動物の名として、用いられていたものではない。子は、字の通り小児の形からきたものであり、丑は、手を動かして、物を取る形からきたものであり、寅は、手で矢をしごいた形からきた字で、それぞれ、動物とは全く無縁なものからなっている字なのである。これが、動物の名にあてられたのは、中国では早くも紀元前四世紀頃、戦国の時代とされているから、いずれにしても随分古いことである。

中国の文化が、そのまま日本に流入し、奈良平安の文化の形成をしたのであるから、十二子などもそのまま移入された事と思われるが、それにしても、三千年近い後世の今の世においても、十二子による年占いが生きているとは、何としても驚いたことである。人知は、此の限りでは、一向に進歩が無いものと見える。

月旅行もま近という今日であるのに、此の頃は、とみにこうした古い術が盛んであるということも、皮肉な世相である。婦人向けの週刊誌などは、これを抜くと一向に売れ行きが悪いというから、全く驚いたものである。最近「西

洋占星術」というベストセラーがあるので、念の為に買ってみた。念の為というところに、やはり、何か期するところがあったと見られても、止むを得まい。

西洋の占星術は、生れ落ちた瞬間に、その人の一生を決する星座がきまっているというのが特長である。いうなれば、その瞬間に、その人の一生は、決定されてしまっているという、誠に宿命的なものである。よい星に当れば結構なことであるが、そうでないと、大変なことになるというわけである。

さて、私も念の為、星占術にあやかってみた。七月廿四日生れである私は、獅子座に属することが分った。これはよい。名前を見ただけで私は喜んだ。百獣の王とされる獅子座であれば、その運勢が悪い筈がないからである。そして、確かによいことづくめであった。

「こうして星座があたえた公明正大な威風と、太陽がさずけた快活と情熱は、あわせて、心地よい明朗なムードを、また、ときには激烈な野生の叫びを、獅子座の人の天性に植えつけたのです」

読むうちに、ついうつとりと心楽しげになるのは、著者の筆致ばかりではなさそうである。やはりこんなところに、人知れずこうした占術に引き込まれる根性があるからに相

違ない。しかし、この占術にも、落とし穴がある。決してよい事ばかりでない。

「獅子座の生まれの人は、かならず短気で気まぐれなところと、妙に寂しがり屋なところがある」

なかなかよく当るものだと感心する。全く私自身そうなのである。こうなると、すっかり、占術のとりこになってしまう。これが人間の弱いところであり、危険なところなのである。

易占いでは、「当るも八罨、当らぬも八罨」といい、これを運用する妙の如何によって、占いが生かされも殺されもするとされている。当たったときは、それなりに戒めとし、当らぬときは、それだけと無祝するまでのものがないときは、近代人さえも、迷信のとりことなる危険性を持っている。「大吉は凶」とすることも、大吉に人が酔わぬように戒めたものであることを知らねばならない。

やや話は、横にそれてしまったが、とも角そんなわけで、馬の年を間もなく送り、羊の年を迎える事になった。

師走を迎える人口の心には、いろいろの惑懷もあることであろうが、何としても、此の世に生を受けたこの私が今ここに無事に生かされていることを、先ず感謝したい。そして、この一年を静かに振り返ってみることにしたい。そ

して、せめて、いろいろなことがあったが、この一年に、私は少くも、これだけは生き甲斐のあるものとして、やってきたというものを幾つかかぞえて、果して悔なき一年であつたかと反省してみたい。一瞬一瞬を完全に生き切る事に難しさを痛感すると共に、それでも自分なりに生きてみたいと、今更のように思わずにはいられない。

来年は羊の年である。何も迷信にこだわるわけではないが、あの平和な羊の生活のように、内外とも平和で無事であることを願うのは、私一人だけではないだろう。それが迷信であろうと、何であろうと、その羊の物静かな、平和そのものだけには、あやかりたいものである。

羊の年
静かな



先ず名号を称えよ

藤井実応

法然上人はよく「先ず名号を称えよ」と教えられました。これは私共日常生活を調えゆく上には最も大切なみ教であると私は頂いております。

私共が日々生活してゆく上に、いろいろな事がおこるものであります。心配なこと、悲しいこと、困ったこと、どうしてよいかわからぬよらな事にも出会います。時には思いがけない幸せがおとずれてくることもありましょう。たくさんのお金が儲かったとか、俸給が思いがけなく上ったとか、望んでいた地位につくことができたとか、願うている人と結婚できたとか、或は可愛い子が生れたとか、うれしい目出たいこともあります。また時には災難に出あうこともあり、病気になることもある、可愛い子に先立たれたり、頼りとし

ている親や夫或は妻がなくなったりします。

このようないろいろな事にであう場合に、うれしいことであうと有頂天になって脚下を忘れて失敗することがあります。悲しい目にあってすっかり力をおとししてしまうとか、またいつまでもくよくよと心配したりして、どうしてもその事にとらわれやすく、明るく生々と進みゆく道を失い易いものであります。どのような心得て処していったらよろしいでしょうか。

私はそのような時に法然上人のみ教によって力強い生きた御導を頂いているのであります。先づ「名号を称えよ」とのみ教がそれであります。

先づ名号を称えよ、名号の徳として妄念もおのづから止み

願心（往生を願う心）も自ら生ずるのである。まして、アミダ仏の御本願のお心は、乱れる心が止みがたいものを導かんが為である。妄念が止みがたいに付ても一向に本願を仰ぐべく、散り乱れて静まりがたいについても一向に名号を称うべきなり」

とのお言葉であります。これは法然上人の代表的な御著作「選択集」というお書物の最初の処に「往生の業には念仏を先と為す」（み仏の浄土に往生させて頂く為には念仏が先である）というこのお示しは、今のみ教と同じ御趣旨であると頂いております。

心は散り乱れ易いですし、思うてはならぬことが思い浮んできては即ち忘念がおきてどうにも致し方ない、そのような時にも、先ず南無阿弥陀仏と称えるのであります。すると名号の徳として妄念もおのづからに止んでゆくし、益々み仏の本願を仰ぐ心も生れてくるのであります、これは実行する者にとつてはそのまま事実であることを体験しとるのであります、まことに阿弥陀仏の本願のお心は、そのような心が散り乱れたり。妄念妄想、悩まされる者を導こうとしての御本願でありますから、このような私を「助け下さる阿弥陀如来である」と、「心には助けたまへ阿弥陀ほとけ」と思い、口に南無阿弥陀仏と名号を称えるのであります。妄念がおきてや

なまい場合にも、心が散り乱れても先ず南無阿弥陀仏と名号を称えるのであります。

妄念があるままに散り乱れるままに称えるのですね、妄念を少しでもおこらぬようにして、或は散り乱れるところを少しでも調べて申せというのではありません。妄念のままに散乱のままに、先づ名号を称えるのであります。

その心を法然上人はまた別のところで分り易く次のように御文し下さいました。

念仏の（人）はただむまれつきのままに念仏を申すのである、智者学者は智者学者にし申してお浄土にとひ、愚かな者は愚かな者にて申して生れる、道心のある人も申して生れ、道心のない人も申して生れる。乃至富める者も、貧しいものも、慈悲あるものも、慈悲のないものも欲ふかいものも、腹なしきものも、本願の不思議にて念仏だにも申せば、いづれも往生するなり」と。

「この生れつきのままにて申す」ということ、即ちそのままの心で申すのですね、道心のない人も慈悲なき人も欲ふかき人も、腹あしき人も生れつきのままで申せとのことであります。これは特に注意すべきことでしょう、道心のない人が道心をおこしてから念仏するのでありません、道心なきままに念仏申すのです。慈悲心のない人が慈悲心をおこして念仏す

るのでない、慈悲のないまま念仏申すのです。欲ふかい人が欲を離れてから申すのでない、欲ふかいます申すのです。その他一切その時の事情のまま、その心のまま先づ名号を称えるのです。うれしい時はうれしいままに念仏申す。悲しい時は悲しいながら、泣きながらも先づ念仏すのですね、心配の時は心配のまま、さびしい時はさびしいまま、先づ南無阿弥陀仏とみ名を称えるのです。すると名号の徳として、悲しみも、心配も、さびしさも、なぐさめられ、力づけられまして、ほの明るい心に導かれ、明るく力強く前進することができるとして頂けるのであります。

私の知人に不幸といえは実に不幸な目にあわれた奥さんがあります。精神異常と精神薄弱の二人のお子さんがあり、夫が中気となって足腰が立たなくなり、つききりの看護をしなければならぬ、身よりの人もよりつかず助けようとせぬのです、その方がおっしゃるのです。私は今地獄におちていますと泣かれるのです。御念仏しても相かわらずの地獄です、もう念仏もやめてしまおうとも思いました、ところが、困ったなら困ったままでお念仏をするのですよと平素から教をうけていたことがふと思ひ出され、また平素念仏していたその口ぐせとでもいうか、ふとお念仏が口から出て下さる、ここが不事だと思つては、念仏を想続していますと申された。その

方は念仏も申されぬような暗い心になる時も相続されました、三年余り、念仏の力に夫の看護をなされました。御主人は感謝の中に息をひきとられました。精神薄弱の方も何かと手伝つて下さるようになり、お念仏を申されるようになる。今迄自分が善い、周囲がわるいとはかり思つていたが、お念仏の力に、おのづから、如来の光明のお導きを頂かれたのでしょう。

自分の至らなかつたことをザンゲしつつ誠をつくしての夫の看護に、夫もまたお念仏申されるようになってこの世を去られましたとのこと、今もその奥さんはふるい立って念仏精進なされています、おかげさまですと感謝をされて生活をなされています。

まことに本人にとって地獄とまで思われる暗がりの中にも南無阿弥陀仏を称えつつづけられました、如来必ずよろしきにはからいたもう。

如何なる場合にもまず名号をとえつつ、わが為すべきことを為しゆけば、如来は救いの御手をのべられて、よろしきに導き給うことを信じて私共日常生活の上に「先づ名号を称えよ」のみ教を実行いたしたのであります。

無媒随録

須藤隆仙

編集部から一年間というお話だったので、
本号を以って随録のペンをおく。

つまらぬ私事、とても人様にご覧してもら
えるような内容のものではなかったが、貴重
の紙面を提供してくだされた編集部の諸先生
がたにお礼申上げ、またあんなものでも目を
通してくれた読者がおられたら、その方々に
も深謝いたします。

この稿が誌上に載りはじめたとき、ある人
から題名の『無媒』とは、どういう意味かと
聞かれたことがある。『無媒』というのは、
人里はなれた淋しいところの意であろう。中
国唐代の詩人許渾の詩に「無媒径路草蕭々」
とあったのを思い出す。原意は媒（な）かだち
が無いということで、隠士が才あっても用い
られないことをいっただけのものであろう。しかし

私は、そんな不遜な考えでこの語を用いたの
ではない。誰一人手をかけてくれることのな
いつまらぬ自分、その心中もまた淋しい山里
ぐらし。その孤独にもまた、弥陀の慈光が、
もらさず照り輝いてくださることを喜ばず
はおられない。弥陀の慈光は落涙して嬉しい
が、身心はやはり無媒の山中に住む愚痴の凡
夫である。弥陀の慈光に照らされつつも、い
まなお織土の生活にあくせくしている「山
猿」のような私、そんな意味での無媒であっ
て、いわば「田舎もののたわごと」というこ
とである。

二月号だったかに誤植されて無媒が無謀と
なっていた。このほうが私にびったりすると
大笑いしたものである。

思えば私が愚文を『浄土』に載せるように
なってから、十六年が流れている。いまは亡
き藤田寛雅先生のすすめで、随想のようなも
のをはじめて書いたのが昭和二十六年で、そ
のとき私は大正大学の学生であった。

しかし『浄土』との結縁は、それよりさら
に十年余もさかのぼる。

小学校六年生で寺に入った私は、すばらし
いものと思って『浄土』を読んだ。当時は総
ルビだったから子供にも読めたし、マンガな
ども載っていて、いわゆる浄土キングと呼ば
れていた時代である。

それにもまして心をひいたのは、吉田絃二
郎先生の随筆である。全面にあふれる宗教の
神聖さが、子供の心を大きくゆさぶって、は
なさなかった。啄木の十五の心が、城跡の大
空の中に吸いこまれたごとく、私の少年時代
は吉田絃二郎の玉筆に吸いこまれていた。

そしてまた、この頃の『浄土』の随所に出
てくる挿画がたいへんよかった。俳画風の墨
画が、これまた十三歳の少年の心をなめつく
してしまうのである。

私はそれをまねて幾枚も墨画をかいたもの
だった。実家に出す手紙の便箋の下などに墨
画をかいて送ったものである。

無媒の里の私には、『浄土』が育ての親で
もあり、また今後を通じての師なのでもあ
る。気がついてみると、雪の日にこの随録を
かきはじめ、いままた雪の日に終るのであっ
た。

（お経の話） 完

——あとがき——

法然上人と観経疏

村 瀬 秀 雄

浄土開宗の機縁

法然上人は十五才で比叡山にのぼって勉強し、更に各宗の碩学を歴訪し、二十六才の頃には智慧第一と呼ばれる程になりました。

このようにして法然上人はすでに第一流の高僧知識として世間の評判がたかかったにも拘らず、ご自身では少しも満足されていませんでした。

「かなしきかな、かなしきかな、いかがせんいかがせん。ここに我等如きは、すでに戒定慧の三栄の器にあらず。この三栄のほかに、我心に相応する法門ありや。我身に堪たる修行やあると、よろづの智者にもとめ、諸の学

者に、とふらひしに、をしふるに人もなく、しめすに輩もなし」（勅修御伝第六）

このようにして更に勉強を続けている時、善導大師の観経流に次の一句のあることに注目されました。

「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるものこれを正定の業を名づく。彼の仏の願に順ずるが故に」

この句は散善義の五種正行を説明する個所に出ている文であります。正行にはお念仏の外に三部経を読み、阿弥陀さまを拝む等の五つの正行があるが、お念仏だけが正定の業であって、他の四種の行はお念仏を助ける行で

あるというのです。その理由はといえば、お念仏は阿弥陀さまの本願に順ずるが故であると説明されました。

法然上人はこの句に注意し、悩み抜いた求道において目を開かれました。この時が即ち浄土開宗であったのです。

「願彼仏願故の文にいたりて、末世の凡夫、弥陀の名号を称せば、かの仏の願に乗じて、たしかに往生を、うべかりけりといふ、ことはりを、おもひさだめ給ぬ。これによりて、承安五年の春、生年四十三年、たちどころに余行をすてて、一向に念仏に帰し給ひけり」（勅修御伝第六）

この時のご様子を、十六門記には次のように記しています。

「歡喜の余に聞人なかりしかども、予が如の下機の行法は阿弥陀仏の法蔵因位の昔、かねて定置るるをやと。高声に唱て、感悦髓に徹り、落涙千行なりき」

法然上人がお念仏だけを往生の業とされ、その他一切の修行を捨てられたことは、まさにお念仏の一大発見であったのですが、それ以来この句の最後にある「故」の一字が大切な

意味をもつようになりました。

二河白道は凡夫の道

お念仏を唱える時の心のもち方として、三つの心が大切であることは前に述べました。

観経疏でも詳しく三心について説明していますが、その終りに二河白道の譬喩をあげています。この話は有名で、法然上人は選択集に全文を引用していますので、大方はすでにご承知であると思います。

一人の旅人が西に向って遠い道程を急いでいます。あたりには人氣がないのに目の前に忽然として二つの河に出会います。南側の方は火の河であり、北側の方は水の河であります。この河の間にごく狭く、ようやく人が通れる位の白道が通っています。しかしこの白道は水のために湿れたかと思うと、他方の火のために焼かれています。とても無事に通れるような道ではありませんので、旅人は思わず後方を振り返りますと、そこには群賊や悪獣が旅人を殺そうと競い来るのでした。旅人はゆくも帰るもできなくなり、恐怖におののくのでした。しかし旅人は前に進んでも後に

戻っても死を免れることができないと知ってそれならむしろ白道を進むべきであると決心します。このように決心すると、たちまち東岸で呼びかける人の声を聞きました。

「仁者ただ決定してこの道をたずねて行け。必ず死の難なからん。もしとどまらば即ち死せん」

更に西岸にはこう呼ぶ人がいました。

「汝一心正念にして直ちに來れ。われよく汝を護らん。すべて水火の難に望せんことをおそれざれ」

旅人はこのように励まされて、白道に一二歩進むと、東岸の群賊たちは叫びました。

「仁者廻り來れ、この道險惡にして過ぐることを得じ。必ず死せんこと疑わず。われ等すべて悪心をもってあひ合うことなし」

旅人は群賊の声に耳をかすことなく、一心に、道を念じ、そして進むと、百歩ばかりある道を一瞬にして渡ってしまい、西岸にゆくことができ、善友たちの慶楽をうけることができました。

この話の意味をのべると次の通りであります。即ち旅人はわれわれ凡人のことで、長い

旅途は人生のことです。周囲に人氣のないことは、毎日の生活に悪友こそ多いが、眞の善知才に逢うことがないという意味です。こちら側の東岸は現在の俗世間であり、兩岸は極樂淨土であります。水河は貪欲の心、火河は怒り憎しむ心であります。その間に狭いながらも白道があるのは、ささやかでも善心があることなのですが、善心は常に貪りと怒りとの繰返しにあって止むことがありません。また後方の群賊悪獣は衣食住の享樂的誘惑のことです。そこで旅人が白道を進むことを決心するというのは極樂に往生を願う心が生じたことです。東岸に人の声ありとは、お釈迦さまの教えが現にいきっていて、西方に進めと教えていることです。群賊の声とは、邪宗や異見の人々の説であります。西岸の人の声とは阿弥陀さまの本願のことで、お念仏を唱えよということなのです。善友は觀音勢至その他の菩薩さまです。

そして最後にこう説いています。

「今二尊のところに信順して水火の二河を願みず、念々に遺することなり、彼の願力に乗じて、命を捨てて以後、彼の国に生ずること

を得、仏と相見せんに慶喜何んぞ極らん」

ここで旅人のことを凡人といったわけは、玄義分に次の句があるからであります。

「観経は、仏、凡のために説きたまへり、聖にはかかわらざるなり」

即ち観経に説かれている人々、韋提希夫人を初め九品の人々は、程度の差こそあれ何れも凡夫であるのです。

観経は念仏だけを説く

観経が説かんとする主旨は何んであるかについて一言つけ加えておきます。

観経疏に

「観経は即ち観仏三昧を以て宗となし、また念仏三昧を以て宗となす」

とありますので、この句からみれば、観経は観経と念仏との二つの教えを平行的に説いた經典であるということになります。しかし他の個所において

「上来定散両門の益を説くと雖も、仏の本願に望むれば、こころ衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるにあり」

といわれています。つまり観経は観仏と念

仏とを説いているけれども、阿弥陀さまの本願という点からすれば、念仏を説いた經典であるということです。

この点について法然上人のお言葉に

「観仏三昧は殊勝の行なりと雖も、仏の本願にあらず。念仏三昧は、これ仏の本願なり」

といわれていることを思い出します。なるほど観仏のことを殊勝の行として一応は重視しているようにみえますが、実は仏の本願でないということから観仏を捨てられているのです。しかも観仏を捨てられるに処ったわけが、単に理論的立場から捨てられたのではなく、自己の体験を通して捨てられたという点に注意しなければなりません。このことは次の話をみれば明瞭であります。

ある人が法然上人にこう質問しました。即ち經典には観仏の功德を説いている以上は観仏といえども、しないよりした方が勝れていると思うのです。これに対して

「源空もはじめは、さるいたづら事をしたりき。いまはしからず」

とご返事されました。いたづら事とは無益なことということです。観仏は無益のことで

あるとわかって、今はしないという体験を以て答えられたお言葉であります。

それなら經典は全く無益のことを、長く詳しく説いているのでしょうか。そんな筈があるわけがありません。この疑問に対しては、選択集の次の一句が明瞭にしてくれますので次にそれを引用します。

「問うて曰く。若ししからば何が故ぞ、直ちに本願念仏の行を説かずして、わずらわしく非本願の定散の諸善を説くや。」

答えて曰く。本願念仏の行は双巻経の中にくわしく既にこれを説く。故に重ねて説かざるのみ。また定散を説くことは、念仏の諸善に超過することを顕さんがためなり。もし定散なくんば、何ぞ念仏ひとり秀でたることを顕さん。例せば法華の三説の上に秀でたるが如し。もし三説なくんば、何ぞ法華の第一なることを顕さん。故に今、定散は廃のためにしかも説き、念仏三昧は立のためにしかも説く」

つまり經典において定散二善ということをやらずらわしく説いているのは、これと対象して念仏が秀でていることを顕さんがためであ

って、もし定散二善を説かず比較したくもその対象がなかったならば、かえって念仏が独り秀でていることが明瞭にならないというのであります。従って念仏の秀でていることがわかれば、定散二善はむしろ廃せられるべきであるというのです。これを廃立の義といいます。

また更に定散二善は要求する者に応じて説いた法門であるが、いざ仏さまが自発的に自分から末法の衆生のために説かれるに当っては、定散二善の門を閉じ、ただひとり念仏一門だけを説かれたのであるといわれました。だからこそ阿弥陀さまは念仏を本願とされ、お釈迦さまは念仏だけを後世に伝えたのだというのが法然上人の結論であります。

日常の論文

最後に観經疏玄義分の序論の数句をあげておきます。

「われら愚癡の身、彌劫よりこのかた流転して、今、釈迦仏の末法の遺跡たる

弥陀の本誓願、極樂の要門に逢えり。

定散等しく廻向して、速に無生身を証せん

われ菩薩藏、頓教一乘海に依って、偶を説いて三宝に帰して、仏心と相応せしむ、十方恒沙の仏、六通をもって、われを照知したまえ。

いま、二尊の教に乗じて、広く浄土の門を開かん、

願わくは、この功德をもって、平等に一切に施し、同じく菩提心をおこして、安樂國に往生せん」

この弥陀本誓願は「本誓偈」ですが、ここで本誓願とは大經のことであり、四十八願のこととあります。また極樂の要門とは観經の所説をいいます。十方恒沙は「広開偈」ですが、六通は六神通のことと二尊はお釈迦さまと阿弥陀さまのこととあります。願以此功德は「総回向偈」として日常に誦誦されていますまた疏に「仰ぎみれば、釈迦はこの方より発遣し、弥陀は即ち彼の國より來迎したもう。彼しこに喚び此に遣る。豈に去らざるべけんや」とある句も、よく知られています。お念仏を唱える者にとっては、善導大師のお言葉が実に多く身にしみこんでいることを知るのがあります。

全仏教徒の胸に

法輪のバツチを

法輪は古代ギリシャ、インドなどに於ける一種の武器でありましたチャラク(Chakras)から始まり、釈尊の教説が衆生の惡を打破することから仏教徒の印となつたのです。釈尊成道の後、鹿野苑で五比丘に初めて法を説いたのを初轉法輪といい、釈尊の教説が國から國へと伝播することを法輪を転ずるといふ。法輪転ずる所、正法あり

仏教徒の自覺と仏教徒としての誇りを胸に輝やかせて仏道に精進するよう全信徒にすすめましょう

定価	一個	百円
割引	十個以上	九〇円
	百個以上	八〇円
	参百円以上	七〇円
	五百個以上	六〇円
以上ボール箱、...		十円増
タイタック、ピン		各五円増

東京都台東区寿一ノ十九ノ一

(桃林寺内)

布教コンサルタンツ

電話(八四一)三二三六番

振替・東京九四七七七

◀浄土宗のおしえ◀を学校教育 において如何に生かしているか

本当の教育は、宗教を度外視して考えられない。
人間形成において宗教の果す役割は大きい。しか
し現在、学校教育の場において、宗教々育がどの
ようになされているであろうか。
その一、二を紹介しよう。

京都東山学園

牧 達 雄

1 本校の教育方針

本学園の教育方針は、校則第一条に示され
るように、法然上人の仏教によって、宗教情
操の陶冶をなし、知育、徳育、体育の調和の
とれた全人教育によって、人格の完成を目ざ
すものであり、現今特に問題化しつつある大
学入試偏重からくる各種の弊害を排し、教育
本来の姿に迫らんとするものである。したが
ってその中心は宗教的情操教育を基幹として
いる。

2 本校における宗教教育の目ざすもの

本校における宗教教育の目的は、宗門の宣伝
や、信仰の強制にあるものではない。青年期
特有の諸種の矛盾に直面し、しかも何かを精
神的支柱として、自我の確立をしようとして
いる生徒個々の人生に、宗教のもつ役割、意
義を認識させ、真実人生への覚醒を期待する
ものである。それを法然上人の仏教によって

確立しようとするのである。具体的には、
本校の訓育方針である、明るく正しく（中
正）、真面目にしっかり（質実）、喜び働ら
く（勤敏）人間の形成を目ざすのである。

3 本校における宗教教育実施方法

上述の教育方針にもとづいて、学園全体
のカリキュラム、行事計画等がたてられ
る。

先づカリキュラムでは、三カ年を通じて
5単位の宗教教科が必修として特設される。
その内容は仏教の真理を探究し、仏陀に帰
依し、自己を深く省察し、老人の教えによ
って、理想社会建設の有為なる人間形成を
目ざして実施され、本校で著作したテキスト
によって指導されるのである。

教科としての宗教教科の指導は、単に知的
なものに止らず、言語、行動等の領域にま
でひろがりをもつが、主として知的、思想
的な面からの情操陶冶に主眼がおかれる。
これに対して、毎月の法然上人の御命日の
聖日行事や、花まつり、成道会、涅槃会等
の仏教行事においては宗教的儀式に直参し

奉仕作業等を通して情意の面からの情操の陶冶をはかるのである。その他、生活指導クラブ指導においても具体的な生活に滲透するよう実施し、仏教を単なる知識としてとり扱うことをさけるのである。

かくして本学園の宗教教育は学園全体の活動において実施しているのであるが、その具体的な詳細については発表当日に提示したい。

東海女子高校

太田 敬光

創立七十八周年を迎える当学園の一貫した教育方針の根幹には仏教、なканづく浄土教を中心とした宗教情操の涵養がある。

このたび女子高校・短大が種々の困難の中にあつて、あえて開設の運びに自ったのは女子教育を是非やらなければ、宗教教育事業が完うされ得ないという関係者の、大正初期以来数十年間にわたる念願がようやく実現したものに他ならない。次に、現在行

なわれている種々の行事を中心に、当学園における宗教教育の実状を報告する。

先づ毎朝、また毎週月曜、の朝礼では明照殿とか法輪のシンボルを通して「アミダ仏」Vに対する礼拝を行なう。また各学年を通じて週に一回、校長自らが完教的角度から広く社会・人生について語る「教養」の時間があり学科としての宗教教科に代るものとして、生徒の一人ひとりに確固たる人生観の樹立を求めていく。その他、御忌日の「明照祭」には法然上人の遺徳を讃仰し、「涅槃会」「成道会」等の聖日には釈尊に関する講演をきくが、県下の仏教関係校合同による「ウエサカ祭」では音楽面などで常に指導的な役割を果たしている。中でも夏休みの五日間、閑寂な山寺で師弟ともども、自己の研鑽につとめる「山上の集い」や、授戒方式にのっとりた正月十五日の「成人式」はすでに十数回を数え、テレビ・新聞等で全国的に報道されるなど、内外の注目をあつめている。なお、家庭における宗教情操を高める意味から毎月一回、市内中心部で『アミダ経講話』等を校長よりきく「日

旺宗教講座」が開かれ、学園内外の多数父兄の出席を得ている。

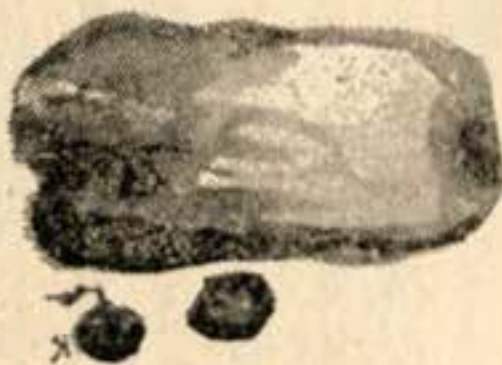
また学生・生徒間で「宗教研究部」の活動も盛んであるが、一体、青年期はしばしば「自我拡大」の時期に当たるともいわれ、このような傾向にある一般青年に向つて、単に教科・学科としての概念的な説明だけでは宗教は受けとられ難い。他力としての浄土教信仰は、人間理性の上に立つ分別心や、小さな自我観念の殻を徹底的にぶち破ったところに成立する。理性中心、自我意識の上に立つて全てを批判的に見ていこうとする青年特有の心情と、宗教信仰、とりわけミダ信仰をいかに調和させるか。

そこに宗門中・高校における宗教教育の困難が生ずるが、結論的には、個々の教師が全人的、主体的に学園のあらゆる場を道場として、浄土信仰、宗教真理を体得し、学生・生徒は赤裸々にぶつかっていくことこそこれからの宗立学校にとって、最も大切なことと思われる。

慶長十九年（四十二才）一六一四年正月十三日永井右近直勝、松平右衛門佐正綱、其他近衆百余と田獵をなす、吉田、佐倉の辺に赴き鹿二頭、猪四頭を獲得す、正月二十四日中原の出発、鷹を放ちて鶴一羽、雁数多を獲得す、此の日小田原に到る、夜本多佐渡守正信同上野介正純、安藤対馬守重信、同帯刀直次連判状を大久保相模守忠隣に遣わす、よりて大久保相模守は配流となる。秀忠は利勝、本多正純等と度々密談す、此れ大阪冬の陣に關する天下大事の事なり。十月二十三日大阪冬の陣、秀忠江戸出発、利勝、酒井忠世、本多正純は秀忠の側を離るべからずと、家康の命令あり、陣中に於ては秀忠麾下左軍大將利勝右軍大將酒井忠世なり、十二月二十七日大阪城堀棲門等を破却す。

元和元年（四十三才）一六一五年四月大阪再乱の趣に依り、家康は利勝、酒井忠世、安藤重信、本多上野介正純、同佐渡守正信、井伊直孝、藤堂高虎等を召して密談す、四月十日秀忠江戸出発、利勝供奉す、四月二十一日伏見城に着く、二十二日二条御所に於て家康と密談す。五月五日家康二条を出で星田に処

(二) 勝利井土城主河古



彦亮井藤

る、秀忠出迎えて陣列の事を談づ。五月六日井伊直孝先鋒、家士戦死負傷者多し、五月七日の先鋒は利勝なり。此の日土井内蔵允元政（三千石）寺田与左衛門時国（二千石）武者奉行長尾新五郎宣景、惣人数は佐久間備前守安政指揮す、長尾宣景は鎌倉権五郎景正の裔なり、始め上様館林城主たり、関ヶ原征伐の後、故ありて流離、由良信濃守国繁の家に在り、近藤石見守秀用を頼みて利勝の家臣となつた。五月七日の戦鬪特に激しく、大阪城兵三万余騎突出す、利勝の兵と激戦す、切勝の軍勢敵の首九十八を獲る、近藤久兵衛一輪鎚酒巻新兵・一番首なり、秀忠は所持せる長柄鎚朱猿毛一本（三間三尺猿毛の鎚）を利勝に賜う。五月八日秀頼卒す、大阪夏の陣を最後に豊臣氏滅亡す。利勝に御加増二万二百石あい合わせて六万五千二百石となる。

元和二年（四十四才）一六一六年四月十七日家康薨御、御遺言に依り駿河久能山中に葬る、近臣本多上野介正純、松平右衛門大夫正久、板倉由膳正重昌、秋元但馬守泰朝四人供奉す、利勝は秀忠の名代となり供奉す、尾張大納言義直郷より使者成瀬隼人正、紀伊大納

言頼宣郷より使者安藤帶刀、水戸中納言頼房郷より使者中山備前守等来たり供奉す、此れ皆御遺言によるものなり。九月五日利勝の奥方江戸屋敷にて卒す、松平庄右衛門近清（親近）の女なり、徳川家の別流長沢松平氏なり佐倉の松林寺に葬る。清光院殿浄誓明徹大師と号す、此の年石藤津和野城主坂崎出羽守成正（二万石）は秀忠の命を拒みて叛逆の件あり、利勝神田門を護衛し出羽守成正を討つ。

勝の家臣とす、食祿五千石なり、秀綱は羽崎に在りて一方の將たり、最上氏に属す、其の武才高きを以て利勝は秀綱を臣とした。現茨城県猿島郡総和村大堤にある鮭延寺は秀綱を葬り一寺を建立、その姓を以て寺号とした。

納す、藤堂和泉守亮虎、東照宮の廟を建つ、夫海僧正大いに尽力す。

元和三年（四十五才）家康を下野国日光山に遷葬す、利勝供奉し警固す。

寛永三年（五十四才）八月十九日從五位下となる、九月六日二条城へ赴く、侍從となる

寛永九年（六十才）正月秀忠病篤し、利勝に遺命の事あり、正月二十四日秀忠薨御、利勝は御遺物白銀二千枚を拝領す、御遺言に依り大本山増上寺に葬る、利勝増上寺修宮に取りかかる、二月より七月に至り完成す。家光七月二十四日増上寺に御参詣、御靈屋成就、

元和六年（四十八才）秀忠の姫君後水尾天皇（一〇八代天皇）の皇后となる、東福門院と称す、その皇女興子長じて女帝となる、一

銀子臘燭等を献上す。

駿河大納言忠長郷（家光の弟、五十五万石）の陰謀あり、發覺す利勝忠長郷を諭したるも聞かず、尚錯乱甚だし、此れ天下の乱れの元となる為、上州高崎城主安藤右京進重長に忠

○九代明正天皇なり、秀忠の姫東福門院御入内の時利勝、酒井雅楽頭忠世供奉す、利勝は綿二百把、銀錢一貫之を献上す、勅使は広橋大納言兼勝郷、三条大納言実条郷を以て御太刀成繩を利勝に賜わる、此の年二万六千八百石御加増合わせて九万二千石となる。

寛永五年（五十六才）三月十三日、佐倉城郭修營の事許可あり、領地岩留村御殿出来、十一月下旬秀忠来る。

長郷を托す、忠長郷自害す十二月六日なり、時に二十八才、高崎の浄土宗大信寺に墓あり

元和九年（五十一才）家光征夷大將軍となる、此の時二条堀川油小路御屋敷拝領、坪数四百坪余、秀忠の命に依り鮭延越前秀綱を利

寛永六年（五十七才）秀忠東金へ御鷹野を行、佐倉泉村御殿に秀忠来る、土井内蔵允寺田与左衛門御目見え。

峯巖院殿晴徹暁雲大居士と号す。

寛永七年（五十八才）利勝の長男利隆從五位下となり、若年寄の席に列す。

寛永八年（五十九才）六月四日加藤肥後守忠広、同豊後守配流となる、九月利勝は東叡山寛永寺と東照宮へ鐘樓堂、五重塔を建立奉

御加増、佐倉から下総国（茨城県）古河へ移る、時に十六万石なり。正月二十四日秀忠の御廟前へ銅燈籠を奉納す。浄土宗正定寺を古河に建立す、大本山増上寺弟子当普玄哲上人

を迎えて開山上人とした。四月古河城主たりし永井信濃守尚政は城前淀城に移る、佐倉城は堀田加賀守正盛城主となる。

寛永十一年(六十二才) 正月十日、古河城部修營の事許可あり。

寛永十二年(六十三才) 十二月利勝、利長を同道し古河に帰城、城の裏に三層櫓を建つ

寛永十三年(六十四才) 一六三六年四月、

家光日光御社参、四月十四日家光古河城に泊す、八月四日利勝の長女生駒麩岐守亮俊室卒す。

寛永十四年(六十五才) 初冬肥州島原の乱起る。天主教徒は益田時貞を戴いて島原半島の原城址に拠つて乱を起こした、幕府は大軍を發して城を囲む、翌年春此れを平定した

寛永十五年(六十六才) 正月二十四日秀忠の七回忌法会を増上寺に於て営む、三月上旬島原の乱平定したる由、細川越中守忠利の告使到る。六月六日執権に因て連署の加判を許さる大老と称す。利勝初代の大老蔵なり。

寛永十六年(六十七才) 一六三九年、正月一日殿中に於て中風となる、今大路道之、半井駒庵、野間玄琢、利勝に付添う、岡本玄治

玩斎、針医寿三等来たり脉を診る、尾州義直郷、紀州頼宣郷、水戸頼房郷始め各大名等、

利勝の館に見舞う、江戸本丸炎上す、この丸御殿出来、又西丸桜田御門石垣長さ五十六間高さ十一間修理、利勝酒井忠世、松平式部大

輔忠次、奥平美作守忠昌等此の事に奉仕す。

寛永十七年(六十八才) 四月十七日家康の二十五回忌法会を日光にて営む。

寛永十八年(六十六才) 八月三日家光の子竹千代誕生す(四代將軍家綱) 八月九日御七夜御祝儀の為、利勝御刀青屋長光、御脇指久国を献上す、利隆は御脇指左文字を献上す。

十一月二十二日利勝は三浦安次の館に到る、故三浦正次の所領の内壬生城二万石を安次に賜う、(三浦正次十月二十七日卒す)

寛永十九年(七十才) 四月家康の二十七回忌法会を日光にて営む。

寛永二十年(七十一才) 九月十四日、春日局卒す、麟祥院殿從二位仁綱了我大姉と号す春日局時に六十四才なり。家光の約母となり初名は阿福、父は斎藤利三、母は稲葉通明の女なり。阿福長じて稲葉正成に嫁し三子あり正勝、正定、正利なり、正成宇喜多氏に仕へ

故ありて美濃に隠る、阿福は家光の乳母となりて能く保育の任を尽くす。春日局英敏にして篤実なり、江戸湯島天沢寺に葬る。家光より春日局に賜りたる弁財天像一体、春日局の遺品として古河正定寺に在り、参拝者多し。

寛永二十一年(七十二才) 正月二十四日秀忠の十三回忌法会を増上寺にて営む、七月六日利勝病を得、武田道安来りて治療す、且つ医師数名家光の命を蒙りて利勝を治療す、七月七日朝、上使阿部豊後守正秋来り疾病を問う、松平伊豆守信綱、利勝の館に止宿す、酒井讃岐守忠勝来りて曰く、家光利勝の見舞に来ると、利勝再三此れを固辞す、七月八日病篤し、利勝年来の記録等を庭前に於て焼く、七月十日利勝遂に卒す、大本山増上寺業誉上人来りて読経す、増上寺に葬る。

宝地院殿前拾遺穂譽泰翁寛玩大居士と号す。家光は阿部豊後守正秋を使者として御香奠白銀三百枚を賜う。利隆謹みて因賜を戴く土井利勝の知慮、酒井の仁厚、青山の勇氣を知仁勇とし徳川家の輔佐役なりし為、此れを寛永の三輔と称したるは世に有名なり。何れも偉大なる人物であつた。(完)

黒本尊記(二)



鶴田湛泉

その日、家康は夜宴で酒をしたたか過ぎた勢か、寝につくと前後も知らずに就睡してしまった。

「今宵こそ天運ぞ、家康を打ち果す交戦の時！」

ほほえんだ侍童は、宿直の武士が寝静まるを待って、刀の鯉口をしめすと、しのび足で家康の寝所へ迫った。

狼費さらいの家康のことである。

灯も消えた暗い寝所にしのび込むと、刀を抜き放って衾しとねの上に股がり、揮身の力を込めて畳も貫けとばかり突きさした。

「ううむ！」

家康の断末魔のうめきを期待していたのに、あに計らんや、何時の手答えがなかった。

あわて驚いて、更に「えいっ」と力まかせと突っ立てたが、今度も手ごたえがない。

「しまった」

思わず叫ぶところであった。

とっさに、手を衾の中に入れて見ると、まだ暖かであ句た。家康の身体を手さぐりでさがし求めたが、手触りがなかった。

「さては、しくじったか」

さすが少年のことである。狼狽と驚駭とが一時に襲って来て、すばらくその場から逃げ去ろうとしたが、暗い寝所のこととて出口がわからず、あわてて部屋をあちこちうろつき廻っているうち、度を失って何にかにつまずいて、どすんと大きな音をたてて倒れてしまった。

その時、

「くせ者っ」

闇につんざく響きと夢を破られ驚いて宿直の家臣が数人あわただしく寝所へかけこんで来て、其の場に少年をからめ捕えてしまった。家康の衾がもぬけの空であったのは、一体どうしたわけであったのか。

その夜家康が心地よい睡魔に誘われて就眠していた真夜中のこと、持仏堂に祀まつって日頃宗拝していた霊像の黒本尊が夢枕に立って、

「いかに家康、今宵はなに故、持仏堂に来て念仏せざるや！」

と呼ぶ声にはっと驚いてがばとはね起きたが、不思議な思いをしてよく考えると、夢の中で呼ぶ声であったのか、いや確かにこの耳で聞いたに違いない、未だその声が聞えるよ

うな思いしながら、

「ああ、どうやら忙しさにとりまぎれて、日課のお念仏を忘れていたようじゃ、勿体ないこと、もったいない！」

つぶやきながら、夜着をぬぎ礼服を改めると、持仏堂に入って灯明をかがけ香をたき二連の珠数をつまぐって低声で念仏を称えていたのであった。

やがて家臣は、からめとった侍童を家康の前に引き据えた。

侍童はも早や視念を定めたものか、悪びれもしないで、

「こと露顕の上は、早く斬って下さりませ」と凜然と云い放った。

少年の顔色は失敗の無念さのため青ざめていたが、声はふるえてはいなかった。

「それほど、余に討たれたいのか」

「ハイ」

家康をねめつけるような憎しみの目で答えると、目を伏せてしまった。

「たわけめ！」

一喝されて、愕然として家康を仰ぎ見た。

「誰れにたのまれて余をねらったのか、あ

りのままに申して見よ」

やさしくききただされて、侍童は案外怯えずに、すべての事情を素直に述べたのであった。

「そちは若年ながら主君のため身の危険をいとわずに一命を抛って余をねろうとは、その志は誠にあっぱれなるぞ。烈さと称すべきで、あながちに咎めるには及ばぬわい。いよいよ斬られぬぞ。武田にとってはこよなき忠臣、早やばや立ち帰ってこの上とも忠義をするがよい」

「一命を助け下さることは有り難く存じますが、帰りましても何と申すべきこともございませぬ。この上はお慈悲とおほしめして疾く斬って下さいませ」

と嘆願した。

「ならぬ」

強く叱責されると、侍童はこんな温情のこもった家康という人物は、自分の主人の勝頼よりはるかに考えが違っていると思えてくるのであった。

家康として見れば、黒本尊の前でお念仏を唱えていたればこそ助かったので、如来のお

慈悲を思うと、助けずにはいらなかったことであろう。

侍童は家康の寛恕の言葉に今まではりつめていた心持がゆるんだのか、がたがたふるえていたが、両眼からぼたりと大粒の涙が膝の

新会員紹介

大阪市阿倍野区相生通二の八	井上ミヨノ
天王寺区小橋寺町西念寺	深沢 靈道
西成区天神ノ森一の一五	城戸 フク
南神合町三五	千代松謙一
東住吉区大塚町	黒瀬シマ子
九四	菊川 カネ
福岡県糸島郡志摩町小富士浄金寺	荒牧 浄海
兵庫県明石市鍛冶屋町光明寺	山口 諦存
滋賀県大津市石山平津町	光 林 寺
静岡県三島市中央町三の四五	関谷 久治
福岡県行橋市行事西町	西 福 寺
柳川市柳町二一平出方	坂本きくの
仙台市北八番丁雨宮五八東北	
大学「如春寮」樋口 まさ	
東京都北区中里町三八五	小林 初子

上に落ちた。

家康は石川伯耆守を召して侍童を預けるとさとしなだめて本国に立ち帰るよう取り計えと命じた。

家臣たちは、家康の心中を計りかねていた不倶戴天の敵とも云うべき勝頼の放った刺客に対して何ら怨恨をいだかないどころか、却ってほめたたえて帰らした態度をいぶかしく思つて、

「表面いともまめまめしく仕えているように見せて置きながら、油断を伺つて殿を刺そうとしたかの憎き侍童めを、釜にほり込んで熟殺しても過刑とはいえませぬのに、烈さまで称されてお帰しになりましたのは、何か思惑があつたのでございまするか」

と近臣がきた。

家康は、その理由を問われても、ただ微笑して一言も答えようとはしなかった。

その後も、近臣から再三問われたので、終にこう答えた。

「余ガ剣を以つて彼を成敗することは、まるで手中の鶏印を握りつぶすよりもいと易いことである。しかし、かの侍童が主君のため

一命を投げ出して忠節をつくさうとするのにこれを殺すのは、良将としての仁愛の心はいえまい。一体人間というものは、自分の手落があつても表面を飾つて人によく思われた

いとねがうものである。まして、たまたま僅かな手柄がある場合には、それを大きく誇張したいのが人情というものである。彼は計画が成就せず斬られるところを許されて国に戻ると、必らず主君に謁しようが、面目がなくしておそらく一言も述べることが出来ないであろう。しかし失敗に終つた理由を問いたださたら、自分をつくらうて余を褒めるであろう。家康は猛将で智謀がありますから、誰がよくその隙を伺うことが出来ませうや。私のような少年の手にかかつて殺されるような人物ではございませぬ。こんな報告を勝頼が耳にしたら、余るかような人物を考え、胆を消すほど驚いて心に畏怖を生ずるにちがいないかの侍童も余を徳と思ひ、或は助けられた思義を感じて報恩のため忠を致すとも限るまい。勝頼もわざわざ重い鎧を負いく多の荷駄を引いて辺疆の地に於て戦うという心も砕けるとも計れまい。之を殺すのは全く益なきこ

とゆえ、許し放つて利のある方に就いたまでのことよ。そち達も、このことをよく考えて見るがよい。これこそ、武略の要領と云うものだ」

手を下さないで、務頼を畏怖せしめようとしたのは、さすがに家康である。

家臣たちは、主君の思慮の深さに、舌を巻いて感嘆したのは云うまでもない。

家康が日頃用いていた二連の珠数は、洛東の一心院（知恩院の法然上の御廟の南隣）を開いた称念上人の考案によるものと伝えられているが、その当時未だ余り使用されていなかったのである。

ところが家康が、二連の珠数をつまぐつては課念仏を唱えていたお蔭で刺客の難と免がれることが出来たという奇蹟が云い伝えられると、御利益のある珠数として尊ばれ次第に人々が用いるようになり、やがて現今の浄土宗の信者に用いられているように、珠数は二連に限るといふほどまで広く一般に用いられるようになったのである。

（完）

三身即一の阿弥陀仏(二)

—— 創価学会批判をかねて ——



岡 本 薫

弥陀三身の根拠

三身即一の弥陀について説いてあるのは、入楞伽經である。その卷六第十の一の偈頌品に次のような文章がある。

「十方の諸々の刹土、衆生菩薩の中の、あらゆる法報仏、化身及び変化は、皆無量寿の極樂界中より出ず」

「化身及び変化」とは応身のことである。「無量寿の極樂界」とは弥陀のことである。極樂界とは仏土ということ、仏土と仏身とは一体である。故に「無量寿の極樂界」とは阿弥陀仏のことである。法身報身応身は阿弥陀仏から出るということであるから、これが阿弥陀如来の三身である。

この偈頌は浄土門にとっては極めて大切なことである。法華經では弥陀は西方の仏となっており、東方、南方等の仏と同格になつてゐる。また阿弥陀經、無量寿經でもそうである。そして法華經の寿量品には「我成仏してより已來甚だ大いに久遠なり。壽命無量阿僧祇劫なり。常住にして滅せず」とあり、これが釈迦本仏を主張する根拠である。よって法

華經から見た場合には、釈迦は本仏であり、弥陀は跡仏となる。「我」と釈迦仏が云われたから、本仏の久遠実成の仏の名は「釈迦」とつけるのが当然であるからである。それ故に日蓮宗は浄土門を下に見る。

それに対抗するために、さきにあげた入楞伽經の偈頌品が極めて大切となる。この文章によつて弥陀は三身をそなえた最高の仏が証明される。しかし寿量品にも「壽命無量」とあるから、久遠実成の釈迦仏(本仏)は無量寿仏阿弥陀仏であるということがわかる。

創価学会批判

日蓮正宗及び創価学会は釈迦本仏を捨てて日蓮本仏をとなえているが、それは法華經違反である。ということは前にかかげた「我成仏してより……」の文章を見れば明かである。また日蓮上人も「日本乃処一闍浮提(世界という意味)一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし」(報恩抄という日蓮上人の御遺文の中の一節)と云われており、明かに釈迦本仏である。

なお日蓮上人は生存中には成仏の位にまで

はのほって居らず、菩薩である。その文証は次の通りである。

「日蓮は幼・若・の・者・なれども法華經を仏むれば釈迦仏の御使ぞかし」(種々御振舞書。五十五才)と云われているおり、「幼若の者」とは未熟の者、罪惡の凡夫という意味であるから、仏ではない。仏とは全く罪のない完全円満な人格者のことである。

また、日蓮上人は六十一才で亡くなられたが、その前年に次のように云われている。

「日蓮はわ・る・き・者・にて候へども、法華經はいかでおろそかにおわすべき……日蓮は日本第一のえ・せ・もの(似面非者)なり」(西山殿御返事)

もちろん、このように、御自分を惡者だと云われても、それは却って心が仏化して向上していることを証明しているのであるが、まだ仏の位にまで達していられなかったという証拠とするには十分である。

故に日蓮上人は菩薩であり、仏ではない。まして本仏でないことは明かで、日蓮本仏論は大嘘のコンコンチキである。こんな嘘をゆるしてはならない。「嘘をゆるすな」という

のが「智慧」であり、折伏であり、破邪顯正である。智慧とは正義ということ、正義とは破邪顯正ということである。

教育基本法にも「……真理と正義を愛し」とあり、日蓮本仏論は嘘であり、真理でないから、正義をもってこれを討たなければならない。仏法に帰依しながら、仏法を破るものを見て、これを放っておくことは怠惰の罪を犯し、獅子心中の虫である。故に釈尊は涅槃經に

「仏法を破るものを見て破邪せざるものは仏法の中の敵なり」(大意)と宣言されている。

本仏釈迦を脱仏として捨てたということは阿弥陀仏を捨てたことである。有史以来前古未曾有の大事件である。十大ニュースなどものかずではない。わずか赤穂一国の君主がはずかしめを受けただけでも、四十七士は命を捨てて主君の仇を報じている。

阿弥陀仏は大宇重の帝王にまします。最尊第一にまします。どうして安閑としていられようか、今や一命を捨てて邪法の撲滅に奮い立たなければならぬ。ただし言論をもってである。

「皇国(仏国)の興廢との一戦にあり。汝等一層奮勵努力せよ」
は東郷元帥ではなく、今や正に最尊第一の阿弥陀如来の御言葉として受取るべき秋である。

業界一の銅瓦・銅板一般 模様葺・別製金具一式

私の先祖の宮及び寺の銅材一式手間代も寄進、神様仏様へ報恩の奉仕故御希望通り安く良く、他所にはできない何代も研究せる卓越せる最高技術最低価請負業者も悔なき様、御相談無料。

東京都文京区春日一の九の二八

銅瓦職協会
相談役顧問
設計及監督

石 黒 工 業

(電話812) 一五五一

絵	連
話	続

みんなの法然さま

——虚仮（こけ）の心——

高 橋 良 和

さしえ 小 林 健 造



法然上人の弟子にはいろいろ人々があった。そのなかでも皇内阿闍梨（こうえんあじやり）はその帰依者のなかでも異色の人である。

遠州桜が池というのであるから今の静岡県の浜松である。その浜松の近くにある池が桜が池というのであるがなんとこの池に身を投げて死んだのである。然しこの皇内阿闍梨は死んだとは思わないので。

世のなかで一ばん長生きするものは大蛇である、今自分は釈尊と弥勒（みろく）さまのお出ましになる中間であるから、長生きたしてありがたい浄土のみに遇いたい。とひたすら念願するうちに、遂にこの桜が池で大蛇に生れかわったということである。

浄土のおしえを求める人たちの純真な求道の心は、この一事でも知ることが出来るのである。

そこで皇内阿闍梨はこの大蛇に生れるという願いのままに臨終のときに、この人は掌の上に水を入れて死んだということである。

そのときにこの桜が池には風も吹かないのは大波が立って塵が悉く吸いこまれて、まことに不思議な風景を画き出したが、これが大蛇に化身した皇内阿闍梨の臨終の瞬間であったとつたえている。

大蛇になってまで道を求めようとしたこの皇内阿闍梨の求道の心をあらわしているか、昔はこんな純真な浄土往生の人がいたのである。

然しこうした求道の心について法然上人に厳正な態度でこれを批判している。そのことばに、

道心があって真剣にみのりを求めるのは結構なことである

が、こ

れは本

当の浄

土のお

しえを

知らな

いから

である

わたく

しにこ

のこと

をたず

ねるな

ら念仏

を申し

て浄土

往生の

出来る

ことを知らしめてあげるのに。

とっている。これはまちがった往生のしかたで大蛇に生れるようなねがいはいたわしいことである。

とっている。

このような往生の人はこの皇門阿闍梨だけでなしに方々にもあったようである。

法然上人のいう正しい信仰、たい一筋の阿弥陀仏の信仰、ということを得得するのにはやはり骨の折れることであって自分自身で勝手に判断して、往生をねがった人たちのあったことはこの皇門阿闍梨でもわかるのであるが、このような意味のちがった安心をもつことは今も昔も同じことであった。目的はただひたすらな浄土往生であっても。その道順において非常なちがいがあることを知るべきである。

また法然上人はうわべだけの、いわゆる人にみせかけるための信心を非常にきらっている。

その一人に妙覚寺の浄心房という人がいたのである。

非常にかしこい、目から鼻に通りぬけるような立派な坊さんであつたらしい。

なかなか信心が深く、自分のいましめの一つとして、一生寺の外に出ない念仏しようときめて、その通り、五十才になるまでひたすら念仏しようと、心がけたのである。であるか

ら毎日、それも終日念仏の声が寺内にひびいてこの人こそ全くの浄土の信仰を体得した人であるというので、外から道を求めにくる人が多く、門前は信者で一ぱいになったのである。

平素からこのようであつたなら、定めて臨終のときはきつと立派な往生をするだろうと、かげながらそのような噂をしている人々をみかけたのである。

人のいのちはわからぬもので、このようなかしい人であつたからみんなの期待をうけていた矢先、どうしたことか五十をすぎた頃、他界したのである。

ところがどうであろうか。

この浄心房の臨終のありさまは、まことに恥しい次第であつて、他人にみせられないような、ぶざまなことで、自らの念もきまらず、往生浄土のあこがれの心もなく、おそらく七転八倒の苦しみのうちに息をひきとつたのであろう。

なあ、平素のおはなしや、念仏をした人とはえらいちがいだ。

あの人がどうして あのような恥しい往生をしたのだろうか、

などという声さえ聞こえたのである。

このようなことはすぐさま法然上人に聞こえることである

から、上人の耳にも入つたのである。

すると法然上人は、

いや、そのような臨終のふるまいなら、浄心房はきつとうわべだけの念仏の信者で、真実の信者ではなかつたのだらう

といっている。

このようなうわべだけの心の人を虚仮（こけ）の心というので、上人は強くいましめているのである。

虚仮の心の人には臨終にも必ず苦しんで死んだのであるからその弟子たちは気の毒だと思つて、四十九日の中陰のときに法然上人を迎えて法霊を営むのであるが、そのときにも法然上人は、

わたしのいうおしえとはちがわないが、この浄心房は、人の上に立つとうという心が多くて、真の念仏を忘れている。とさとしている。

念仏を行ずる人は、心の底から、行にも心もともどもに真実の人でなければならぬことをいうているのである。

誰でもわかることであるが、さて実行しようとなると、これは非常にむづかしいことである。

身心共に、ここに法然上人のいう念仏の行があるといえる。

ご法語をいただく

解脱幢相の衣をかたにかけ、釈氏につらなりて仏法修行せざらんは、実にたからの山に入て、手をむなしくかへるためしなり。

(要義問答)

法然上人は、ある人に向つて

「うけがたき人界の生をうけて、あひがたき仏教にあふ。このたび出離をもとめさせ給へ」

といわれました。出離をもとめるとは、迷いの世界から脱することであつて、阿弥陀さまのお力を信じ、お念仏をとなえることであります。すると、その人はこう嘆きました。

「上人の仰せは、まことにご尤もであります。が、どうにも名利を求める心から離れられませんが、それに道を修めようとする気になれません。一体どうしたらよいのでしょうか」

すると法然上人は、やさしく次のようにさとされました。

多くの人は身体が老いて衰えるか、または病患に悩んだあげくに修行の道に入ります。

しかしほんとうは、身体が健康である内に仏道修行に入るのがよいのです。たとえ破戒重悪の人であつても、修行の道に入れば必ずお釈迦さまの説法を聞くことができる道理であります。肩にお袈裟をかけ、手にお数珠をもつて説教の座に連なれば、自然と修行ができます。

さて、解脱幢相とはお袈裟のことであり、釈氏とは僧侶のあとであります。

近頃よく「仏法不在の時代」という言葉を聞きます。世間を見渡して、どこに仏教の信仰があるのだろうか、仏教は形式だけ残つていて、修行の心がなくなつてしまつたということでありましょう。

しかしほんとうに仏法が不在なのか、欲求されているのか、ここでは問題にいたしません。ただここに万巻の經典があり、これを講説する人に不足しないことは事実であります。信仰はどだい遺つたり貰つたりするものでありません。また飾つておいたり蔵つておいたりするものではありません。あくまでも各人が求め、各人が自分で自分のものか、か方法がありません。いかに遍く阿弥陀さま

の光明が照していても、この光明に浴そうと願う人でなくては光明はないのとおなじです。百雷が轟きわたつても聾者には聞えないのと同じことです。

年老いて、世間から「あの人は余生をおくっている」といわれている人もあります。病床にあつて悶々の情に耐えかねている人もあります。こうした人々は、己が人生を顧みて信仰に入つてゆきます。しかしここまで追いつめられなくても、仏道修行に志す人があるとなれば、その人は優れた人、明るい人生を持ち得た人といわなくてはなりません。

仏道修行といつても、それが難行苦行であつたとしたならば、破戒重悪の凡人にとってはまさに高嶺の花であります。修行したくもできない相談であります。幸い釈尊は、お念仏を称えれば、ただちに阿弥陀さまの十二の光明に浴することができるといふ念仏修行をのこされました。こうした有難い仏法があるのに、これを修行しない人があるとすれば、その人はせっかく宝の山に入つていながら、宝を見ずに空しく一生を終つてしまう人であるといふのが、このご法語の教えであります。

現代語訳 歎 仏 頌 —完—

吉 田 定 久

018 幸仏信明

018 世自在王仏

是我真証

信じませ

発願於彼

願い発して

力精所欲

努むるを、

018 王よ、どうぞ私が発した此の願は、何等

虚偽、売名的なものでないことを御信じ

下さい、王よ私にとって唯一の指導者、

真実の証明者でございますから特に御願

い申しますので、私は全力を「自分の成

仏、浄土の建設、民衆の救済」に集中し

精進して参ります。

019 十方世尊

019 常に十方の

智慧無碍

御仏に

常令此尊

わが心行

知我心行

知らしめん

019 十方（全世界）においでなさる御仏は、

みな智慧の円満な方でございます。私は

此の御仏方にも私の願（心行）を知って

頂きたいと、何時も念じて参ります。

020 仮令身止

020 身を苦しみに

諸苦毒中

止どむとも

我行精進

行は励みて

忍終不悔

悔えざらん

020 以上私（法蔵比丘）が求める

「道の達成」

「願の成就」

は簡単なことでありません。此の先ど

んな苦難が待ち構えているか、然し夫を

恐れたり、避けたりはしません。たとえ

地獄の底に止どまろうと、所謂、

「願成就」

への行は励むばかりで、派生的な苦痛

などを嘆えたり、悔んだり、決して致

しません。

修養ひめくり

価 100円・〒55円 用紙33枚
タテ37cm ヨコ13cm

会員のかたは単価85円 送料実費
見本は 150 円お送り下さい

浄土宝暦

価 30円・〒25円 40ページ

50部以上より単価25円 送料実費

発行所 法然上人鑽仰会

須藤隆仙著

B 6 版 本文 264 P

価 1300円 (送料)

『日本仏教の北限』

インドから中国を経て日本に渡った仏教が、その毛端をどこまで伸ばしたか。エゾ地に残存する仏教の資料を解説して、日本仏教の北限を明かにしたもの。

内 容

- 古代インド文化の余流 ○慈覚大師エゾ地渡来の伝説
- アイヌと仏教 ○庶民念仏信仰の北進 ○浄土宗の北限
- 禪宗の北限 ○真宗の北限 ○密教の化限 ○日蓮宗の北限
- 宗門改めの北域 ○納経者の北遊 ○民間信仰の北限
- その他31項

函館市船見町 18-14

発行所 教 学 研 究 会

振替・函館 5591番

「浄土」講読規定

一部定価 金六十円

(送料 六円)

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 十二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十一年十一月二十五日 印刷

昭和四十一年十二月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

真野正順著

新刊 日本人の信仰と生活 B 6判 356P
価 700円 70円

昭和のはじめの国家主義の嵐のなかにあって真の日本人の在り方を示すため、仏教的ヒューマニズムをおしすすめ、また戦後の混乱期において、新しい日本人の精神生活に礎をあたえた筆者の、仏教者としての信仰と人生観のあふれる遺稿のかずかずをまとめた珠玉の随想録

内 容

第1章 香を焚く 第2章 生活を強く美しく
第3章 先聖行ける道 附 真野先生を偲びて

発行所 法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田橋1-11-6 振替東京 82187

藤井実応著
生きる歩み 文庫判
価200円 45円

15年にわたるハガキ通信集
著者の信仰生活の記録
揭示伝道、文書伝道、布教の参考資料
電車の中でも、2分3分のひまにも手軽によめる
病人の見舞、法要のひきものにも適す

愛知県小坂井局区内伊那新屋

申込先 藤井実応 振替名古屋
27462